

せ た か む い

発行・古平町史編集委員会
編集・古平町史編集室
第七十六号 (一日発行)
平成八年一月一日

北海の古平風土物語

四三

古平尋常高等小学校校高等科に入學
担任・千葉信夫先生 大正十四年昭和二年

高 橋 源 五口

千葉先生の指導の仕方は、今まで過ぎて来たこととは全く違うものであることが分かってきた。

尋常五、六年のときは受持ちの先生が不在がちで、自習で過ごすことが多く、自由放題で、教室では遊び騒いで、隣の教室の先生によく叱られたりしたものであった。しまいには運動場に出て、陣取り遊びに夢中になっていたものであった。

謹賀新年

平成八年元旦



古平町史編集委員会

委員長 越中 庄司

委員 八木 金蔵

木村 輔宏

高野 俊和

水見 八郎

副委員長

藤雄

本間 鉄男

宮本 正敏

田岸 倉治

西館 昌巳

岩崎 勝博

山口 文彦

村井 芳男

町史編集室長 (総務課長) 丹後清市・囑託

毎日の予習とノート整理がや
かましく、新しい学習法である
グループでの学習や研究・作業
にも熱心であった。投げっぱな
しにされていた習字・図画にも
熱心で、これはまた先生の得意
なものであった。

国語 (読方)、綴方 (つづり
かた) には大変な力の入れよう
で、自費で学級文庫をつくり、
辞典や学習参考書類、文学全集
なども買い揃えて使わせたり、
貸し出しもしてくれた。

当時『綴方鑑賞文選』という
雑誌 (一か月五銭) があり、そ
れの購読や投稿をいつもすすめ

陸地は

難所ばかり

これから浜マシケへ行く
ことになったが、途中には
岩や大きな石が多く、波の
引いた時にその間を伝わっ
て急いで渡るのだが、波が
来た時は岩にびったりと抱
きついてた。船で波をか
ぶり、陸に上がる時も波を
かぶり、ようやく着物を乾
かしたのにここでまた波を
かぶり、その難儀はとても
言葉では尽くせない。
ようやく浜マシケの運上
屋に着き着物を乾かしたが、

アイヌの「ことわざ 世間ばなし集」から

(6)

荷物の中にもすべて塩水が
入り、持ってきた本なども
すっかりぬらしてしまひ、
たき火で三日間もかけてこ
れを乾かした。ぬらして使
えなくなった物もあり大分
損失をしたが、命のあった
ことを皆で喜び合った。
荷物の中に曾谷取扱の大
事な帳面類があったが、こ
れは入念に包んでいてぬら
すことがなかったので助か
った。
たまたま松前から来てい
た船もこの嵐にあり、船は
無事だったが乗組員の一人
が大けがをしたという。

ていた。

たまたま幸村重一郎君の綴方
『蠅 (はい)』と長谷川豊一君
の俳句「ゆく秋や鶏盗むいたち
かな」が、秀作と入選になった
時は大変な喜びようであった。
これに刺激されて、雑誌の購読
や一生懸命になって雑誌への投
稿を競うようになった。

放課後の教室では算術、国語
(読方) の勉強の遅れを取り戻
すために、十数人の者を集めて
特別指導もされた。中には三、
四年生の教科書から始めた者も
いて、これが高等二年卒業まで
続いたのである。

■晴天が広がり歓喜する！
太陽が見えたと思うとみるみるうちに青空が広がり、遠くの山々が一望でき、方向を見定めるのに好都合となった。下を見ると、谷間が交差する中に一條の川の流れているのが見えた。「これは海が近いのかも知れない」と考えたが、古平、美国、積丹、或は古宇地方のいづれなのかは全く分らない。

しかし、川下に行けば必ず町に出られるだろうと、とにかくその川の辺りを目標にして山を下りることに意見がまとまった。

■川をめざして下山
かなりの高い山であったので、いざ下りるといっても雪が深く困難であったが、今は前途への目的があるので歩くにも励みがあった。

明治13年泊村茅沼炭坑越え
から古平へ雪の山

古平行の記

が並んでいて、そこから流れ落ちる様はまさに、左右懸崖の滝ともいえる絶景であった。この景色を移せるものなら定めし名勝となろう。

■ようやく溪流に出る

なおも山を下ったがこの辺りは足が止まらない程の急坂で、幸いに木の枝や笹が出ていたのでそれにすがりながらようやく下りることができた。

溪流の水は意外と深かつたが、岩の上から落ちる水はすっかり凍っていて、美しい巨大な氷柱と化していた。松の葉と笹の緑以外は辺り一面の銀世界で、一本の木についていた赤い木の実が鮮やかに見えた。

■一軒の小屋を見つける
一同、勇んで溪流沿いに下って行くと、遠くカラスの鳴き声が聞こえてきた。「さては人家が近くなったか——」と、心がおどるものがあつた。

どこかに小屋でもないかと、辺りにくまなく目を配りながら進んだが見当たらなかった。なおも進むと、幸運にも雪の中から屋根根を出している一軒の小屋を見つけた。

「ああ、よかった！」
小さい無人の小屋であつた。

昔の浜 舟小屋のこと 波 辺 ハ ツ

秋始末と、冬支度らしい仕事有一段落してほっとしているこの頃です。雪が降ってもおかしくない季節ですが、お天気の日があると一日一日がなにか儲けもの———と思つて、呑気に、これから迎える冬の除雪作業の鋭気を養つております。

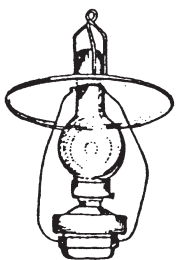
十一月の末頃でしたか、お天気が良かったので浜町まで歩いて行きました。子どもの頃から言い慣れている、港町の木工所の海岸沿いを歩いていたら、砂浜にドングイ（イタドリ）の一面に密生しているのが目に止まりました。いつもは自転車ですら走っているのに気がつきませんでしたが、見事に成長しているドングイを見てみると、途端に昔の舟小屋のことを思い出してしまいました。

ドングイは昔、浜に舟小屋を建てるのにとても貴重な材料でした。私の子どもの頃は浜は舟揚げ場になっていて、そこには舟小屋がずうっと並んで建てていたものでした。当時、漁師さんたちの多くは和舟で漁をしていましたから、秋になると、冬に備えて協同して舟小屋を建て

るのです。みんなで山へ行つては刈り取ってきたドングイ、ヨモギ、カヤなどと、それに各自が出し合つた丸太や板などで立派な舟小屋を建てます。

学校から帰ると、友達を誘つてすぐ舟小屋に行つては、カレイ網にかかつた「ホオズキ」とツブ貝を拾ってきます。このツブ貝はどうゆういわれか「東京ツブ」といわれていましたが、ストープの上で焼き、正油をちよつとさして食べるのが最高の味でした。「ホオズキ」は鳴り口を開けて、中身を出すとそれで出来上りですがよく鳴りました。

現在の浜は、テトラポットで護岸されてしまつて、もう舟小屋のことなどは遠い遠い昔のことになってしまいました。
和舟の時代に櫓を漕いで漁業に励んだ、今は八十路の主人にも舟小屋のことを語ってもらいました。





病床日記

福井幸平

手術も予定より時間がかかり、病室で待っていた家内もずいぶんと気をもんだらしく、同室の患者にいろいろと慰められていたようでした。私もはつきりと意識はないものの、手術中の話し声や物音は聞こえたり途切れたりしながら、午後一時から四時過ぎまで手術を受けていました。

初めの予定では、一時間半ぐらいで終わるのが倍の時間かかってしまい、本人よりも家内の方が疲れ切った顔をして待っていました。麻酔がだんだんとさめて、全身がわなわなとふるえる程の寒気がしてきて、看護婦さんが肩に湯たんぽを入れてくれた。暴れないように、手足、頭はいつも縛られていて重苦しかった。しかし現代の麻酔の進歩か、決して苦し

くはなかった。むしろファーンとした夢見心地のようでもありました。のどが乾いて水が飲みたくなっても、誰も警戒してか飲ませてくれない。どうして水を飲むのが悪いのか分かりませんが、同室の患者の目が厳しくてだめでした。何しろ腹から下の方はつねつても反応がありませんが、胸からは動かすことができるし二十年前に大きな手術をした経験のある私には、麻酔も含めて医療の格段の進歩に驚くばかりです。

医者も看護婦も、患者第一に大事にしてくれることもあの頃とはずいぶんと変わったものだと、しみじみ感謝の心でいっぱいです。我慢することは何ひとつなく、話せば何でも処置してくれます。我慢は美德ならずです。看護婦も本当によく訓練されていて満足でした。

一夜が明けて「もう食べてよし、飲んでよし」。その反動か、あれ食べたいこれ食べたいで、食べ物に大いに関心がありました。

ある時「色ごはん」という名前が忘れましたが、チャーハンでもない、オムレツでもない、肉やら何やらいっぱい混じった、カレー粉のきいたまぜごはんが大変おいしかった。私は生まれて初めて

の？ おいしさだったので、新聞の折り込みの裏にマジックペンで、簡明率直に感想とお礼の言葉を書いて、「今後とも患者のために大においしいものを作ってくださいるように——」と、食器と共に運搬車に下げておきました。

そしたら誰の目に止まったのでしょうか。ほどなく婦長さんの案内で、調理の若い栄養士さんが二人私を訪ねて来て、「お礼に上がりました」

とあいさつを述べられ、かえって恐縮してしまいました。

患者さんから、このようなおほめのことばと、お礼を言われたのは病院始まって以来とのことで、大変感謝されて帰られました。

うそか本当か、それ以来病院食が一段とおいしくなつたと、同室の患者からかわれました。

それから二、三日して、患者全員に食べ物のアンケート用紙が配られたのは事実です。

この話がいつか病院内に広がって、私の顔をのぞきに來る女の患者さんがいたとか、いないとか？ まあどうでもよいが少しは私の顔も売れたのか、以来、女の患者さん ※（次ページ下段へ続く）

短歌

岬短歌会詠草

雪圍いの縄に縛られし真紅のバラ薔が八つ隙間より見ゆ

街角に会ひし新聞屋さん留守がらなわれに師走の集金日と言ふ

展示会場のわが歌を見て立ちとれば友は写真に写しくれたり

玉風の吹き頻く磯に打てる波しぶきは居間の玻璃窓洗ふ

歌誌あまた並ぶ文学館のケースの中わが「海鳴」がまづ目につきぬ 森木富美子

コスモスの風に反かにゆるるさま夏にわかれとささやく如し 越野敦雄

文化賞病む身に受くるわが傍に君は時長く添ひて下さる 菅原節子

リストラに喘ぐ人らも残る人も否応なくヤマセは沖にどよめく 魚屋友子

菩提寺の板碑に閑村の由未書きあるはめづらししみじみと読む 榊 佳代

菊花展の花と香りの中に酔ひまはりの景色見るゆとりなし 田中香苗

いかめしき門ありし古き関口邸こぼされて広く均らされてとり 池田テル

熊牧場クッタラ湖地獄谷と見てきたり硫黄の臭う今宵の宿は 越田由起子

漁場へと向へる夫ののる船は高波越ゆる度に見えぬも 丹後初江

吹雪止む道辺のをみな子胸に抱く黒猫とふわりと雪に放てり 堀 昭子

正月のまゆ玉飾りに吊さむと半紙畳みて練網に裁つ 山口すエ

長崎ふゆ

鈴木時子

竹内コト

堀 典子

越野敦雄

菅原節子

魚屋友子

榊 佳代

田中香苗

池田テル

越田由起子

丹後初江

堀 昭子

山口すエ

※ からもあれこれと差し入れが多くなつた。ありがたいことです。

隣の部屋に、菅原節子さんが入院されていたので、たぶんその辺からのおこぼれかもしれない。刺身、ところてん、即席茶わん蒸しね、筋子、果物などなどを頂いて、まさか病院で食べられるとは思いませんでした。

毎日の病院生活は、闘病、などというものではなく、楽しいくらいのものでした。医師の問診にも決まって、

「すこぶる快調——」と、申し上げることにしていました。医師も「回復が早いネ」と言うと、さっと次の患者に移って行きます。医師も例の「色ごはん」のことは知っているらしく「あの時の色ごはん、そんなにうまかったかなあ」と、婦長に言ってたようでした。

人間、叱ることも大切でしょうが、時にはほめて励ますことも感動と生きがいにつながるものです。小さな思いつきでしたが、何か良いことをしたようなさわやかな気分です。あの若いきれいな二人の栄養士さん、ますます専門家として、今後大いに活躍されることを期待しています。



吉平ホトトギス会

達磨絵と目線合いたる文化の日

越野 敏雄

門前に水浴ぶ雀見ておりし

灯台の空を汚さじ雁帰る

水見 句丈

昆布舟海のうねりの起つ中に

ロスからの子が来て墓参叶えられ

山口 浪

盆参り医師の許可得てふるさとへ

ポインセチヤ花舗にあふれてイブ近し

仲谷 美砂

ブラジルに送る日本の新茶かな

編針の音する夜の長きこと

大島 喜恵

枯庭に燃ゆる一樹のななかまど

逢わずとも賀状に浮かぶ顔のあり

仲谷 比呂子

冬涛の波止越ゆ高さ鷗舞う

子の新居出来六甲の冬あける

大和田 絵伊

豆烏賊の程よく焼ける薪だんろ

山葡萄熟れしも子等の姿なく

本間 正次郎

年毎に掛大根の数の減り

白球を追う少年の汗みどろ

越野 清治

春風に乗りて打球の場外へ

約束も果たさぬままに年の暮

熊谷 楠丈

雪搔きの手やすめ話何にやかや

流水に閉じこめられし漁港かな

福井 幸平

尾白鷺かもめを餌に棲みつけり

落ち葉焚く煙が役場の裏手より

斉藤 波留

記念樹を聖樹としたる町役場



詩と歌に見る (2)



明治六年（一八七三）、金沢藩士の林顯三が北海道から樺太（サハリン）を巡回して、各地の様子を文章や彩色した絵で描いて、古平にも立ち寄っているのだが古平の記録は何もない。

また、画聖といわれる富岡鉄斎も古平に宿泊しているが、描かれたものは残念ながらこれも全く無い。

明治の中頃と思われるが、詩人・岡本暁翠がもつこ岩を詠んだ詩がある。

題は、「モツケ巖」となっているが、岩の形がカエルに似ていることから、青森地方でのカエルの方言「モツコ」からこの題名になったものと思われる。

漢詩の正しい読み方はわからないが何となく意味はわかるようである。

モツコ巖 岡本暁翠

吾向渺蔭座水中

幾年凌雪幾年風

称来性状究如墓

窮連曾任波碧空

皆さんもモツコ岩を見ながら、それぞれで考えて読んでみてください。

この一年程の間に、消防庁舎、B・G古平海洋センター、中学校と、人目を引くモダンな建物が出来て話題になったが町民の一番関心があったのは中学校の新築かもしれない。

落成式の日には秋晴れの見本のような好天に恵まれて、百七十余人の中学生、教職員と父母、来賓など六百人をこえる参列者があって、今、学校に寄せられている期待の大きいことがうかがわれる。

初めて学校を訪れた人たちは、まず学校のユニークな外観をしげしげと眺めて

——中学校落成式から——

眼
今年は
これでしめたい

から入る。すでに取り壊された古い校舎のことを思い出しか、なにかしきりに話し合っている人たちの姿もあった。

式典は、参列した父母のため息がもれるような新装成った体育館で行われたが、中学生の整然とした、落ち着いた態度が落成式の雰囲気を感じ上げた。参加者と一緒に合った一体感があったが、校歌斉唱では、緊張のせいにかちよつとポリウム

が下り、全員での『君が代』に負けたようだ。自分たちの学校の晴れの落成式だという、喜びいっぱい歌声を聞きたかったと思った人も多かったのではなからうか。これより少し前、古平小学校開校百二十周年記念式があったが、式にいささか退屈？ していたせいか、小学生はここぞと会場に響けとばかりに歌っていたのが思い出された。

祝宴はまた稀にみる賑わいであった。始めに、協賛会長からの力のこもった心情をうったえるような挨拶は、歓談の中でもひとしきり話題になったが、祝宴をしめる「三本手じめ」では、率直でしかも軽妙な挨拶に笑声と拍手が起き、会場内がどつと沸いた。

終わって、関係者のご苦勞に感謝しながら退席した。

外に出ると、太陽はすりばち山の方に傾きかけていたが、今日は本当にこの時期には珍しい程の晴天で、行事もまた盛典であった。

文化会館の広場に建っている高野素十の句碑にある、

ふるさとを同うしたる秋天下
というの、こんな日のことをいうのであろうか。

遥かなる故郷の思い出 丸山沖の鰯釣り

2

16

橘 義 春

この辺りの海の深さは、二十尋(約三十ヤード)くらいで、餌の付いた針金の仕掛けをドボンと海の中に放り込み、仕掛けが底についたらぐいぐいと手元にたぐり寄せ、魚が食いつくまでこの動作のくり返しで、腕が疲れるし根気のいる仕事である。

勝男さんは、早くも中型の鰯を二本釣り上げた。さすがベテランと感心したが、にわか漁師の私の方はゼロである。

お昼頃になると潮がぱつたりと止まってしまった。次の潮が動くまでは釣れないというので二人で昼飯を食べたが、勝男さんは昼寝である。

いる。そのうちに、海の中でパツと花が咲いたように見えた。さてはクラゲの好物か? などと思っていたらそれはタコであった。口のあたりに引っかかったらしくタコが逆になり、まるで大輪の花が咲いたようで、よく見ると大ダコだ。

「大変だ、大ダコが釣れた!」と叫んだら、勝男さんが飛び起きてきて、大きなたもでさつと

今は遠くなった戦争という時代を生きてきた私たちは、明けでも暮れても、食糧難には本当に悩まされ通しでした。父母は家族のために、それこそ畑のすみからすみまで掘り起こし、一つのいも、一粒のかぼちゃでも多く蒔いて食糧の確保にやっきになっていました。私たちの娘時代は、いもとかぼちゃで育ったようなものです。

すくい上げてくれた。「こつたらどこでも、おつきたタコいるんだもんなあ——、あざれだ」と驚いていた。

潮はまだ止まったままなので勝男さんはまた寝てしまった。私はまた、柳の下のだジョウをねらって仕掛けを下ろした。待つこと二十分くらいか、今度はグイグイと大きな引きがあった。

「それ! またタコか——」と色めきたつたが、どうもさつきとはちよつと勝手が違うようで、ぐーと重くなったり、すーうと軽くなったりする。手にあ

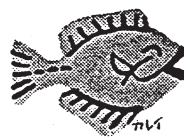
娘時代の暗い思い出 食糧難で買い出し

竹内コト

縁あって今のところに嫁いで来ましたが、毎日毎日、今日は何を食べさせたらいいのかと、台所に立つのもおっくうになっていました。

そんな時でした。島中のおばあちゃんは何回となく買い出しに行つては、私たちの所にも米や麦、豆類と買って来てくれまして。そのうちに、私もいつしよについて行くようになりまし

まったときは勝男さんを起こせばいいと、強引に引き上げたら海から顔をのぞかせたのは鰯であつた。口からピンク色をした風船のような袋をだらしなく出して上がってきた。自分でたもを使って舟に上げた。これもまるまると太った大物で、ざつと九十センチはある。柳の下の二匹目は鰯であつたが、鰯はだめでも釣果は上々で何でも釣れば楽しいものだ。今度は三匹目のドジョウをねらうか。(続く)



たが、留寿都に買い出しに行つた時のことです。

それは冬の季節でしたが、馬そのの跡のついた道路を歩いていたら、つるつと滑って、思いつき後ろへ引くり返ってしまいました。

ようやく農家を探し当て、でん粉をわけてもらつてやれやれと安心して背負つたところ、それが生でん粉だったので背中から水がだらだらと流れてきて、寒中なのだからだがびしょりで、着替えもできないまま駅まで歩き通しました。何としてで(次ページ下段へ続く)※

登別温泉と岡田半兵衛

——古い文書に見る—— 登別温泉の開発と岡田家

◆整理して

昭和五十五年、

当時、登別温泉会
社専務の岩原さん
が「登別温泉の開
祖は岡田半兵衛」
という記事が北海
道新聞に載って、

地元でも話題になったという。

古くから当時の幌別場所の請

負人をしていた岡田半兵衛が、

登別温泉の周辺でいおうの採掘

もしていたので、何らか温泉へ

のかかわりがあったのではない

か？ ということは、当然考え

られることであつた。岡田家の

初代・弥三右衛門の出身地であ

る近江八幡町（現在の近江八幡

市）でも、郷土の研究者らがそ

れについて書いてある。

参考にしてはいる資料が限られ

ていて新しい資料も無いことか

ら、その書かれてはいる内容も似

たようなものになるのは仕方な

いこと、先の新聞記事の内

容も、近江八幡町で昭和十年五

月に発行された新聞の記事とほ

んど同じ内容である。

◆温泉場を開いたのは
改めて岡田家関係の手元にあ

る資料と、これに関する登別市

の発行物などを見てみると、ど

うやら温泉を温泉場として最初

に利用したのは岡田半兵衛のよ

うだが、岡田家でやっていたの

は温泉場ではなく硫黄の採掘で

あり、そして、その事業で莫大

な損失を出したことからやがて

事業から手を引き、それにとも

なつて温泉との関係もなくなつ

てしまった。

◆湯治場の開祖

ところがその後——、時期

としては僅かの違いで温泉に転

居して来た滝本金蔵が温泉場と

しての経営に乗り出し、温泉へ

の新しい道路を開いたり、温泉

場としての整備に努力して、そ

れが現在の登別温泉の発展の基

盤になったというわけである。

滝本金蔵が以前から温泉にか

かわつていたとして、幌別役所

から『湯守』であることを許さ

れ、旅人宿を開いたのは明治に

なつてからのことである。

そして地元総代人も勤め「湯

元の滝本」として温泉開発の功

績がたたえられ、登別温泉湯沢

神社境内に『滝本翁記念碑』が

は温泉ではなく『湯治の開祖』
と書かれている。

『開祖』という解釈は別にし

て、古平場所の開拓に深いにか

わりをもつ岡田家のひとり、

登別温泉の開発に先がけて手を

着けたのは確かであろう。

× × ×

それから時代は百四十年が過

ぎた平成七年の年の瀬に、かつ

て、のろし台が あつた丸山の

ふもとに、町民待望の温泉が吹

き出たという。登別温泉とまで

はいかないようだが、周囲は四

季おりおりの景観にあふれ、積

丹半島沿岸の絶景が下に広がる

恵まれた場所である。

新年を迎える町民にとつての

福の神であつてほしい。

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

※ も持ち帰らなければ——と

一生懸命駅まで担いで来たところ、

取り締まりが厳しく、お巡

りさんが一人一人の荷物を調べ

ているのです。そこは何とかく

ぐりぬけてようやく余市駅に着

きました。余市駅では駅員もい

つしよになつて調べていました

が、そんなに多くの量でないと

見逃してくれます。

さんさんな思いをして無事に

古平に着きましたが、意地の悪

い人だと、みんな取り上げられ

てしまうことさえあります。

食糧の買い出しもお金を払う

だけではだめで、衣類や指輪、

時計の類まで持つて行つてよう

やく食糧が買えたのです。

今考えてみると、まるで別の

世界の出来事だったような気が

します。

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~